
嘘つきの娘

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきの娘

【Zコード】

Z3337B

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

夕闇に染まる逢魔ヶ時、花澄はひとり、稻荷神社の境内にいた。家に帰りたい。けれど帰れない。なぜなら、どうしても会いたくない人が待っているから……。そんな花澄の前に、ひとりの男が現れて。

1 帰りたくても帰れない

ふと足元から伸びる影が長くなつたような気がして、花澄は空を見上げた。

この季節特有の褪せたように青い空は、いつの間にかやわらかな茜色に変わっていた。街を照らす斜陽は秋の頃に比べ、淡く優しい。

ふんわりと浮かぶ千切れ雲が桜の花びらのように色づいていた。もうすぐあたりは闇に包まる。そろそろ帰らないと母が心配するだろう。ただでさえ最近物騒な事件が多く、寄り道をしないよう言われてしているのだから。

けれど……。

再び視線を足元に落とすと、花澄はため息をついた。靴の底で地面を蹴つてブランコを漕ぐ。錆びついた鎖が微かに軋んだ。

花澄がいるのは、通学路の途中にある稻荷神社だった。境内の隅にブランコや滑り台などの遊具が置いてあり、ちょっとした公園のようなスペースが設けられている。社殿の裏には鎮守の杜がこんもりと繁つていて、夏になると虫取り網を持つた子どもたちがやってくる。

花澄もよく幼なじみの男の子に虫取りにつき合わされた。花澄としては、なかなか捕まらない虫を追いかけて汗だくになるよりも、他の女の子と一緒に社殿の簾子に腰かけ、アイスキャンディを食べながらおしゃべりに興じていたほうが何倍も楽しかったのだが。

中学生となつた今では、男の子と遊ぶことはとんとない。あんなに仲が良かつた幼なじみでさえ、お互いに声をかけなくなつた。小学校までは一緒だった登下校も別々だし、休み時間に廊下でそれ違つてもちらりと一瞥するだけだ。

どうして急に疎遠になつたのか。当事者である花澄にもわからない。なんとなく、気がついたらそうなつていた。自覚してからも元に戻るとは思わない。別に仲良くしてはいけないわけではないの

だが、なんだか以前のように振舞うことがためらわれるのだ。

よそよそしくなつた子どもたちを見て、母親たちは特に何も言わなかつた。ただ、困つたような、呆れたような苦笑をこぼしただけだ。もしかしたら彼女たちは原因が分かつてゐるのかもしれない。

ざあつと風に木々がざわめいた。ハッと顔を上げると、残照は消え、境内は薄暗い水色に染まつていた。頃に触れる空氣の温度が唐突に下がりはじめた気がした。

夜が来る。

朱塗りの剥げた鳥居の向こうで、街灯に明かりが点いた。神社を囲む家々の窓からもあたたかな光がこぼれている。どこの家でも夕食の支度に追われている頃だろう。空腹とともに心細さがこみ上りてきて、花澄は思わず泣きそうになつた。

帰りたい。

でも、帰りたくない。家に帰れば、母と『彼』が待つてゐるのだ。

会いたくない。

だから帰りたくない。帰れない。

風が強くなつていく。木々のざわめきはひと際大きくなり、杜の黒い影が踊り狂う怪物のように揺れている。鎖を固く握りしめ、花澄は藍色に深まつていく空を見上げた。

チカチカと瞬く一番星が、遠い。

朝からやたらとそわそわしていいた母を思い出す。表情や口調、仕種が、母の胸は喜びでいっぱいなのだと物語つていた。

あの星と母は同じだ。花澄を置いてけぼりにして、ずっと先に行つてしまつ。『彼』の待つ遙か遠くに。

花澄はまだそこへたどり着けない。最初の一歩を踏み出すことをできていない。

このまま、永遠に追いつけないのでないだろうか。スタートラインに立ち竦んだまま、小さくなつていくふたりの背を見送るしかないのではないだろうか。

ずっと、ここに、ひとりぼっち。

「こんなところで、何してるんだい」

不意に。

風の唸り声も木々のざわめきも切り裂いて、低い男の声が響いた。驚いて振り返ると、ブランコから少し離れたところに背の高い人影が立っていた。

まるで地に落ちる影のなかから現れたよつて、黒々と、まっすぐ

に。

2 狐面の男

風がやんだ。

人影の纏う黒いコートの裾が大きく翻り、元の位置に戻る。木々のざわめく声も消え、ふたりの頭上にはらはらと枯れ葉が降り注いだ。

花澄は茫然と人影を見つめた。

すらりとしていて痩せている。といつてもなよなよとした印象は受けず、無駄なく引きしまったという感じだ。姿勢がいいから余計そう思うのかもしれない。

「女の子がひとりで出歩くような時間帯じゃないだろう」

人影は足音を立てず、すっと近づいてきた。空いていた隣のブランコに軽い動作で腰を下ろす。

「早くお帰り。まだ完全に暗くなつていなかから、街灯を頼りに走つていけば大丈夫だ」

そう言うとコートの内側に手を突っこみ、何かを取り出した。煙草の箱とライター。煙草を箱から引き出して口にくわえると、両手で口元を覆うようにして火を点けた。

シュツと小さな音がして、ライターの火がやや俯いた横顔を照らす。

狐。

一瞬、そう思った。顎の尖った細面。少し伏せられた目はナイフで入れた切れこみのように細く、目尻が吊り上がっている。無表情のはずなのに、皮肉げに微笑んでいるような薄い唇。まるで狐の面のような造作だった。

「おじさん……だれ？」

ライターの火が消えても、男の顔ははつきりと目に焼きついていた。その残影と田の前の人影を重ね合わせながら、花澄は尋ねた。男は紫煙を吐き出し、小さく苦笑した。

「おじさん、ね」

花澄は目を瞬かせた。男は三十代前半、ちょうど母と同年代に見えた。だから『おじさん』という呼称を使つたのだが。

「そうか、俺もそう呼ばれる年齢か」と

「……お兄さん、のほうがよかつた？」

「いや、別にいいよ」

男は煙草を持つほうとは別の手を上げ、ひらひらと横に振つた。

「それより」

暗がり越しでも視線を感じる。隣に人がいるといふことに、花澄は安堵を覚えた。

ひとりでは、ない。

「いつまでもこんなところにいないで、おうちに帰り。いくら住宅地のなかにあるからって、夜になつたら危険だよ」

低い、するりと耳に入つてくる声。思わず聞き惚れるといふのは、こいついう声を言つのだらうか。

特に口調がやわらかいわけでもないのに、響きが優しい。固く強張つた心をたちまち解きほぐしてしまう声だ。

「……おじさん、もしかして変質者？」

「は？」

「最近、このあたりでよく出るんだって。日が暮れてから、ひとりで歩いてる女の子に声かけて、お尻とか胸を触るんだよ」

もしも不安な夜道でこんな声にささやかれたら、どんな女でも油断してしまうかもしれない。変質者というと、いかにもあやしいオヤジを想像するが、彼は格好いいオジサマだ。声と外見を利用して、何人でもか弱い乙女を餌食にできるだらう。

「……あのね」

しばし沈黙していた男は、笑つてゐるような唸つてゐるような、妙な声を洩らした。何か言いたげに花澄を見つめていたが、やがて脱力したように頃垂れると、長く重いため息をついた。

「本当にそつくりだな……」

「え？」

「なんでもないよ。……じゃあ、俺がその変質者だつたらどうするんだい？」

花澄は唇を引き結んだ。ふいつと男から田を逸らし、視線を地面に落とす。

「別に、おじさんが変質者でもかまわないよ。このままどつかに連れていかれちゃつても、いい」

「……どうして？」

男の声が一段低くなつた。細い目がすつと細まり、針のようになつた気がした。何もかも見透かしているまなざしで花澄を見つめているような。

もしかしたら彼は人間ではないのかもしれない。この神社に祀られているお稲荷様の使いだという狐が、ひとりぼっちの子どもを哀れんで、人の姿を取つて現れたのかもしぬれない。

それでもいいと思った。だれかがそばにいてくれるなら。『彼』に会わずに済むのなら。

「家に帰りたくないの」

おかえり、という母の声。あたたかな夕食。テレビを見ながら交わされる、他愛もないおしゃべり。

いつもと変わらぬはずのそこにひとり、異質な者がいる。

花澄にとつて、『彼』は母と築いてきた日常を壊す破壊者でしかない。

受け入れてしまえば、もう一度と戻れなくなるとわかっている。だから、怖い。会いたくない。家に帰れない。

「……今日、歸つてくるの。わたしの『お父さん』が顔も声も知らない。会つたことさえない。

まるで世界を覆つていぐ闇のようだ。その姿なき存在は、花澄の心を冷たく震わせた。

3 言語(1)

花澄の父は、結婚詐欺師だつたらし。

母が言ひには、「そんじょそいらの俳優がなんて田じやない」ほど格好よくて、「紳士といふ言葉は彼のためにある」ほど優しかったそうだ。

最初、それは母を騙すための演技だつたわけだが やがて、眞実のものへと変わつていった。

いつしか父は、母を本当に愛するよつになつていたのだ。父は母にすべてを打ち明けた。分は結婚詐欺師で、金田的で資産家の令嬢だつた母に近づいたといふことを。母は驚いたが……父に別れを告げることは、なかつた。

一度だけ、なぜ別れなかつたのかと訊いたことがある。すると母は微笑んで、こう答えた。

「愛していたからよ」

騙されていたのだと知つて悲しくないはずなんてないのに、怒りを覚えないわけなんてないのに。それでも母は、父と一緒にいることを望んだ。胎の中に宿つた父の子を産もうと決めた。

母の家族は猛反対したといつ。

どんなに説得しても耳を貸さなかつたそうだ。だから、父と母は手に手を取つて駆け落ちした。

すべてを捨てて、母は父を

そして、花澄を選んだのだ。

「こんなとこを転々としたつて言つてた。せめてわたしが生まれるまでに、完全に行方をわからないうつにしたかつたんだつて」唇を動かすたびに白い息がこぼれ、もわつと広がり、霧散する。視線を上にやると、暗い空に白い三田用が引っかかるつていた。ガラ

スを細かく碎いて撒いたような星の光は微かで、弱々しい。

男は黙つて煙草を吸い続けていた。もう何本目だろう。吸い殻は

男の足元に溜まり、山のようになつているに違いない。

「それで結局、この町に落ち着いたんだって。暮らしあじめたアパートの、隣の部屋のご夫婦が同じ年頃で、同じように赤ちゃんがいて、とってもいい人たちで、すぐに仲良くなつたって」

それが幼なじみの両親だ。彼らは花澄の両親の事情を知っているようだつた。母ひとり子ひとりの暮らしを、親身になつて助けてくれた。

「それから、わたしが生まれたの。わたしの名前、花澄っていうんだけど……お父さんがつけたんだって」

花のようになつてほしい。心の澄んだ女の子になつてほしい。そんな願いがこめられているのだと、母に教えてもらつた。

「……その名前、気に入つてるかい？」

男の問いに、花澄は小さく首を傾げた。

「……わかんない。でも、嫌いじゃない、と思つ」

「そうか」

ふつと、男は微笑つた。なぜだろ、嬉しそうだ。

花澄がじつと凝視していると、今度は男が首を傾げた。

「なんだい？」

嬉しそうだね、と言おうとして……どうしてかためらわれた。花澄は「まかす」ように訊き返した。

「おじさん、変質者じゃないなら、黒狐？」

「……は？」

「だつて顔、狐みたいだし。足音しなかつたし、なんだか身軽そうだし。それに服が黒いし。ここのお稲荷様の使いの狐つて、真っ黒な毛をしてるんだつて。だから黒狐っていうんだよ」

男はしばしばかんとしていたが、やがて嘆くように空を仰いだ。

「……変質者の次は神様の使いか」

恨めしそうな声に、花澄は慌てた。

「やつぱり変質者だつた？」

「いや……うん、もうなんでもいいよ。さみの好きなように思つてくれ」

なんだか投げやりな返答だが、花澄はシッコまぢかにわいせつともいひつけにした。

「じゃあ キツネわん」

「……うん」

煙草をくわえ直しながら男が頷く。苦笑混じりの微笑を浮かべているのが見えずともわかるようだつた。

なんだろう、この気持ちは。風が弱まつたとはいえ、肌を刺すような寒さはかわらないのに。胸の奥からあたたかい熱が滲んでくる。知らず、花澄は男に笑い返していた。

3 言語り（2）

花澄はブランコの上に立つと、板を蹴り上げるよじて勢いよく立ち漕ぎをはじめた。ガツシャンと鎖が大きく鳴った。

闇に染まった視界が前に後ろに大きく揺れる。風が耳元でくぐもつた音を立て、冷氣が肌を切るようだった。

「わたしが生まれてすぐ、お父さんが出ていったの」

揺れるたびにブランコは勢いを増していく。このまま飛び上がりば、あの星の許まで行けるだらうか。それとも、底なし沼のような闇に落ちていくのだらうか。

男は沈黙していた。

「お父さんには前科があつて、それを償いにいったんだって。罪を償わない限り、わたしの父親を名乗る資格なんかないって」

母はもちろん反対した。泣いてすがつて、言い争つてまで止めようとした。けれど、結局は折れてしまった。

何年かかっても必ず帰つてくるからという約束を残して、父は去つた。

それから十三年。

「今日、帰つてくるの」

ブランコが、大きく前方に揺れた。 今だ。

充分ついた勢いを助力に、屈伸を発条にして、花澄はブランコから跳んだ。

ふつと全身を浮遊感が包んだ。夜空が、星の瞬きが、一瞬近くなる。

花澄はとつと手を伸ばた。けれど指先は空を搔き、放り出された体はそのまま弧を描くように落し下する。着地の体勢を取る間もなく、暗い闇の底、固い地面に向かつて。

「！」

息を呑んだのは花澄か、それとも男だつたのだらうか。

反射的に目を瞑つた花澄を受け止めたのは、たくましい人の腕だった。

「うわっ！」

男は花澄を抱えたまま勢いに負けて倒れこみ、地面に転がった。彼にしつかりと抱きこまれていた花澄は、鈍い衝撃を受けただけだつた。

「キツネさんっ」

花澄は思わず、悲鳴のような声を上げた。

男は「いたたた……」と咳きながら身を起こすと、コートの胸元にしがみついている花澄の顔を覗きこんだ。

「怪我はないかい？」

「…………うん」

「それはよかつた。でも、ああいう危ないことは感心しないな。もし俺が受け止めなかつたら、頭から地面に突つこんでいたと思つよ？」

花澄の髪についた土を払いながら、男は諭すように言った。花澄は俯くと、小さく声を絞り出した。

「ごめんなさい…………」

「わかってくれればいいんだ」

男がやわらかく笑つた気配を感じて、花澄は男のコートをぎゅっと握りしめた。男の胸に額を押ししつけるようにして、深く顔を埋める。

泣きたい。

今ここで、声の限り泣きじゃくつてしまいたい。もう中学生になつたからだとか、そんなことは忘れて、泣くことしか知らない赤ん坊のように、涙と一緒にこの胸に溜まつた気持ちを吐き出してしたい。

この人なら。

彼なら、何も言わずに受け止めてくれるような気がした。肯定も否定もせず、ただ黙つて聞いてくれるような気がした。

母にさえ打ち明けられなかつた、この想いを。

「……どうしたんだい？」

男の手が、つと頭を撫でる。ほんのわずかにためらつているような手つきに、なぜか懐かしさがこみ上げてきた。

父も。

記憶にない父も、こんな風に頭を撫でてくれたのだろうか。

おとうさん。

顔も声も、においもぬくもりも、何ひとつさえ知らぬその人に向かつて、嗚咽に喉を震わせながら花澄は呼びかけた。

4 本物の恋 (1)

父は花澄を愛していたのだと、母は言つ。花澄のために自ら厳しい場所へ赴いていったのだと。誇らしげな、悲しげな母の笑顔を、今でもはつきりと憶えている。

なんて自分勝手なのだろう。

花澄のためだなんて、そんなのは詭弁だ。母や花澄を置いていつまで罪を償つてほしいなんて、花澄は望んでいない。そんな愛情なんて求めていらない。

父は知つているのか。母がどんなに苦労してきたのか。果たされる確証なんてない約束を抱え、どんなに不安だったか。

花澄が。

花澄が、どんなに。

「…………ごめんなさい」
花澄が泣きじゃくっている間、男はずっと優しく抱きしめ、頭を撫でていてくれた。そのお陰でこみ上げきた感情を我慢せずに吐き出せたのだが、我に返つてみると氣恥ずかしさと申し訳なさでいっおいで、顔を上げられなかつた。

男は片腕の抱擁を解くと、花澄の頭に載せたままの片手を、後頭部の輪郭をたどるようにゆっくりと動かした。

「落ち着いたかい？」

尋ねてくる口調はやわらかなままだつた。花澄がこくりと頷くと、

そうかと小さく微笑んだ気配がした。

どうして彼はこんなに優しいのだろう。

会つたばかりの花澄に、こんなにも優しくしてくれただろう。

そうしなければならない義務などありはしないのに、どうして。

「……きみは」

ふと男が呟きを落とした。つられるように顔を上げると、暗がりの向こうから見つめてくる瞳を感じた。

「きみは、お父さんのことが……嫌いかい？」

風の音にさわられてしまいそうな、掠れたような問い。だが男の言葉ははっきりと花澄の耳の届き、鼓膜を、心を、震わせた。

男はもう一度、花澄の頭を撫でた。

「きみをそんなにも泣かせてしまったのは、お父さんの仕業だらう？」
違つかい？ と訊いてくる声に、花澄はただ、意味もなく唇を動かすことしかできなかつた。

違うと言えたら、どんなによかつただろう。

父なんて関係ない。花澄が気にかけているのは、心動かされるのは、いつだってこの世でたつたひとり、母だけだと。

けれど、けれどそれは。

「嫌い、なんて……」

ぽろりと。

こぼれたのは、想いか、涙か。

きつと両方だ。

「そんなこと、思えるへりこ……わたし、お父さんのへりこ……知らない」

けれど、それはただの屁理屈に過ぎない。

本当は、本当はいつも、ずっと叫んでいた。心の奥底の、深い深い場所で。

どうしてそばにいてくれないの。どうしてわたしを置いていくの。ねえ、お父さん。わたしを愛しているのなら、ねえ、どうか。

「知らないよ……っ」

どうか、そばにいてください。

花澄は両手で顔を覆つた。背を丸めると、再び男に抱きしめられた。

「う。 真実はとても単純で、だからこそ認めたくなかった。

さびしかった。

さびしくてさびしくて、父がそばにいないことが、置いていかれたことが、たまらなく悲しかった。

「わたしのために、つ、罪を償つくらいなら、普通に、一緒にいてほしかった。抱きしめたり、頭撫でたり、肩車したり、手をつないだり、い、いろんなこと、してほしかった……！」

「一トの胸元にすがりつき、花澄はしゃくり上げた。風の唸り声も木々の叫びも遠くなり、己の身の内から溢れ出る思いだけが、渦巻くよ」こうだまする。

どんなに頭のなかを探しても、父の記憶は何ひとつない。真っ白な虚無を見るたび、思い出のない自分を確認するたびに、泣きたくなつた。

もしかしたら、父は花澄を愛してなんていなかつたのかもしれない。だから家を出ていつてしまつたのかもしれない。そんな恐怖を抱くようになったのは、いつからだろう。さびしさとおろしさ、静かに膨れ上がっていく感情を母に打ち明けることは、どうしてもできなかつた。

どんなに時が経とうと、父を信じて帰りを待ち続ける母の心を、裏切つてしまつような気がして。

「お、お父さんが帰つてくるつて聞いて。わたし、怖かつた。う、嬉しいんじやなくて、怖かつたの。お父さんに会つて、どんな顔されるのか、どんなこと言われるのかつて。もし、もしかしたら、嫌われてるんじやないかって……」

「そんなこと」

体を包みこんでいる腕にぎゅっと力がこもる。男が声を押し出すように、苦しげに言つた。

「そんなこと、あるわけないじゃないか」

情けない自分の嗚咽の向こうから聞こえてきた言葉に、花澄は口をつぐんだ。薄闇の奥を探るように、男の顔を見上げる。

男はそっと、花澄の濡れた頬を指先で拭つた。

「そんなこと、あるはずがない」

男の声は、ひどく苦渋に満ちていた。両頬の涙を拭い取ると、彼の指は顔から離れていった。

「……キツネさん？」

呼びかけると、やわらかく後頭部を押さえるようにして抱き寄せられた。すっかりなじんだ抱擁の感覚のなか、彼は「違うよ」と呟いた。

「違うよ。俺はそんな尊いものじゃない。きみを泣かせてしまつような……嘘つきだ」

花澄、と。

まるで凧いだ水面に波紋を生む一滴のように、小さな小さなその声は、だが確かに、音を立てて花澄の心を叩いた。

4 本物の恋(2)

時が止まつたような気がした。

花澄は目を瞠つたまま、男の腕のなかで凍りついた。あらゆるもののが遠ざかり、自分を包みこむ男のぬくもりだけが熱い。どれほど固まつていただろうか。一分か五分か、あるいは一秒にも満たない数瞬か。

やがて、音が、色が戻り、髪を弄ぶ風の冷たさを耳朵に感じた。花澄はゆっくりと瞬くと、茫然と、いつそ間抜けな声を洩らした。

「…………え？」

顔を上げ、まじまじと男を見つめる。

「さつきの……どういう意味？」

男は花澄の視線から逃げるよつに顔を逸らした。
応えはない。

「ねえ」

花澄は男の腕を掴み、小ちく揺すつた。こちらを見よつとしない細い目に、閉じたままの唇に、微かな苛立ちを覚える。

「キツネさん！」

思わず声を荒げると、男はよつやく振り向いた。
そして小さな、本当に小さな声で、ひと言。

「…………そういう意味だよ」

花澄は動きを止めた。

穴が空くほど男の顔を凝視する。頭のなかが真つ白になり、そして一気に感情が爆発した。

「…………つー！」

言葉にならないとはこのことだ。喉の奥どけるか舌先にまでぶつけてやりたい文句が溢れてくるのに、許容範囲をオーバーし、口を開けた途端に散じてしまつ。

花澄は口をぱくつかせていたが、よつやく上擦った声を絞り出し

た。

「な、なんで言つてくれなかつたの？」

「コードの胸元を掴んで睨みつける。ぐつと眉間に力をこめていた。」
「……」
「……」

男は一瞬沈黙し、静かな口調で答えた。

「きみと同じや。父親だと名乗つて、きみがどんな顔をするのか……怖かつた」

後頭部に添えられていた手が頬へと動き、皿尻に残っていた涙を指先でそっと拭われる。

「いつまでも帰つてこないきみに、もしかしたらと思つていた。ブランクにぽつんと座つていったきみを見つけたとき、確信したよ。」

「花澄は、俺に会いたくないんだなって」

男は、どこかさびしげな微笑をこぼした。

「だから、名乗らずにどこかへ行つてしまおうと思つた。でも、一度でいいから、きみと話がしたかった」

「ごめんな」と続いた言葉に、花澄はきゅっと唇を噛んだ。
体が震える。皺が寄るのもかまわず、更に強くコードを握りしめた。

「本当に、どうしようもないくらい、自分勝手な男だ。

花澄は生まれてはじめて、だれかをぶん殴つてやりたいと思つた。

「……いで」

沸き上がつてくるのは、目がくらむよつた激しい怒り。

「ふつ、ざけないで！」

今までの人生でこれ以上ないといつほどの大音声で、花澄は怒鳴つた。

「十三年も放つたらかしといたくせに、帰つてきたらまた置いてこうとするなんて、ふざけないで！　お母さんがどんなに待つてたかわかってるの！？　ずっとずっと、いつ帰つてくるかもわからないお父さんを馬鹿みたいに信じて……っ！」

母の笑顔が脳裏にちらついた。だれよりもそばにいる花澄が、手

の届かない星のように感じてしまつほど、いつそ愚かしいまでの一途さで父を愛してゐるのに。

「わたくしだつて、怖かつたよ！　お父さんになつて、本当の気持ちを知るくらいなら、お母さんとふたりつきりのまままでいひつて思つた！　でもつ、それでもつ、ずっとさびしくて、ずっとそばにいてほしくて……だからお父さんが帰つてくるつて、会えるつて知つて

不安やおそれの底に確かに存在した、再会への喜び。

スタート地点で立ち竦んでいたのは、一歩を踏み出すことができなかつたのは、ただ、勇気がなかつたから。

父の口から語られる真実を知り、受け入れる勇気がなかつたから
けれど。

「わたしはお父さんの」と、何も知らない。思い出なんかない。真っ白で、なんにもないの。ねえ、でもそれって、新しくはじめられるつてことでしょう？ なんにもない空白を埋められるつてことでしょ？」

けれど今は父と向き合いたい
一緒に取り戻していきたい。
離れていた十三年分の時間を

もう置いていかれるのはいやだ。
離れ離れだなんて「ごめんだ。」

お母さんを悲しませないで。わたしを、さびしくさせないで

体のそれが伝わったように、声が震えた。知らず滲み出した涙か
目の縁から溢れ、男の指先を濡らしていく。

「そばに、いって、お話をうながす」

どうとう堪えきれず、花澄は再び嗚咽をこぼした。渦を巻いていた怒りはいつの間にか、どうしようもない慕わしさに変わっていた。傍から見れば、きっと駄々をこねる子どものようにみつともないだろう。だが、どんなに滑稽だったとしても、光にさらされた自分の真の思いに目を瞑ることはできなかつた。

「一の胸元に額を押しつけて泣く花澄の肩に、ためらひがちに男の手が触れた。少々ぎこちない動作で抱きしめてくる。

「……いいのかな」

涙を拭ってくれた指先が、優しく髪を梳いた。

「俺は、きみに『お父さん』と呼んでもらえるような、きみの父親だと名乗るに足りる人間なんだろうか」

花澄はこのとき、はじめて理解した。

自分が愛されていることを。彼が彼なりのやり方で、娘を愛していくくれたことを。

正しかったのか間違っていたのか、花澄にはわからない。しかし、ずいぶんな遠回りの果てに、ようやくはじまりにたどり着いたような気がした。

スタートラインを越えるときは、きっと今だ。

花澄はぐすりと鼻を鳴らして顔を上げた。火傷をしたような瞼をこすり、田の前の男を、父を見つめる。

そして微笑んだ。のちに、彼が母にそっくりだと言う笑顔で。

「今も昔も、これからも、わたしのお父さんはお父さんだけだよ」

5 霧の父と娘

「帰つたら、お母さんに謝らないとな」

隣を歩く父がふと言つた。

花澄は父を見上げた。こうして並んでみると、やはり父は大きな人だった。狐によく似た目はすいぶん高い位置にある。

アパートへの帰り道。あたりに花澄と父以外の人影はなく、ふたり分の足音がやけに大きく響く。ぽつぽつと立つ街灯がさびしげにアスファルトを照らしていた。

「お母さん、怒つてた？」

すっかり遅くなつてしまつた。今日の夕飯は「駆走にする」と言つていたのに、きっと冷めてしまつているだらう。

「いや」

しかし父は苦笑すると、小さく首を横に振つた。

「心配していたよ、とても」

その言葉が、遅すぎる帰宅だけを示しているのではないこと、「

花澄は気づいた。

母はわかつていたのかもしれない。何も言わない娘が、父に対してもどんな思いを抱いていたのかを。たくさん悩ませて、心配をせつしまつたのだらう。

「……そつか」

古びた部屋のドアを開けたら、ただいまと心配をかけて「めんなさい」と言おう。

父と一緒に。

「ねえ、お父さん」

「なんだい」

花澄はずつと気になつていたことを尋ねた。

「どうして……罪を償わなきや、父親だって召乗れないって思ったの?」

父は糸田をちょっと瞪り、それから困ったように笑った。

「難しい質問だなあ」

ゆつくりと視線を前に向け、どこか遠くを見つめるよつて瞳を細める。

「……生まれたばかりのきみを抱いたとき、その重さに腕が震えた。とても小さくて、だけど、とても重かった。ああ、この子は生きているんだって……尊いからこそ、命はこんなに重いんだって実感した」

父は開いた両の掌を見下ろした。十三年前の感覚を確かめるように、指を曲げたり伸ばしたりする。

「そして、ふと思った。俺は、この尊い存在に恥じないだけの生き方をしてきただろ？ かと。こんなにも重い命を背負つにふさわしい人間なのかと」

伸ばされた指が再び曲げられ、やがて拳を作った。静かな双眸が花澄を映す。

「答えは否だつた。……俺はきみのお母さんに出会つまで、本当にひどい生き方をしてきたんだよ。たくさん人を騙して傷つけてきた。そんな俺が、きみの尊さを守つていくなんて、許されないよつて思えたんだ」

だから、と父は続けた。

「罪を償おうと思った。真つ白な腕できみを抱きしめられるよつて。いつか、大きくなつたきみに、胸を張つて父親だと誇つてもらえるように」

それは、勝手な自己満足で　けれど、確かな愛でもあつた。

「だけど……結局は花澄を泣かせてしまつたな」

「いいの」

花澄はそつと父の手を握つた。その顔に戸惑つような表情が滲む。指の長い大きな手。母よりもしつかりした骨の造り。掌の厚い皮膚の感触。

生まれたての自分が感じていただろうすべてを、こうしてまた感

じられる」とだが、この「うえなく嬉しかった。

「今なら、わかるから」

父の想いを、母の想いを。十三年間、絶えることなく降り注いできた光のような愛を。

「ありがとう、お父さん。……おかげりなさい」

何よりも父が待ち望んでいただらう言葉を、満面の笑顔で告げる。くしゃりと父の顔が歪む。だがそれはほんの一瞬で、すぐに見慣れた微笑みが浮かんだ。

「 たどいま、花澄」

彼の目が潤んでいることに気づいて、やはり父は嘘つきだと確信した。

泣いてもいいのに。

だが花澄は何も言わず、その代わり、父とつないだ手に力をこめた。

伝わってくるぬくもりが沁みるようになたたかかった。

汚泥に咲く花（前書き）

旧サイトのWeb拍手に掲載していた短編です。

「あなたはきれいな人ね」

突拍子もない褒め言葉に、男は奇妙な生きものでも見るかのよくな目を女に向けた。

女はにこにこと、力が抜けるほど無防備に笑っていた。まるで世界の裏側に濁る闇など知らぬような、子どもじみた笑顔。この女はいつたいなんなのだろう。恐怖にも似た気味の悪さを覚えながら、男は皮肉な嘲笑を返した。

「さて、俺のどこを見たらそんな感想が出てくるのかね」「だつて本当にきれいなんだもの」

何がだつて、だ。

「……お嬢さん、あんたはビーッしようもないほどおつむが弱いらしないな。普通、自分を騙そうとしていた詐欺師にそんなことを笑つて言つやつがどこにいる」

「いじにいるわ」

さらりと答える声には、真綿のような籠の中で育てられた小鳥にはふさわしからぬ強かさが滲んでいる。見つめ返してくる瞳に濁りはなく、けれどもその奥には仄暗い深淵がじっと潜んでいた。

男は顔をしかめた。無垢な清らかさを保ちながら、人間の汚濁を知っている。そんな矛盾を、彼女は見事に成立させていた。

癪に障つた。はじめてだれかを嫌いだと思った。

どんなに白のままでありたいと望んでも、自分は生きていくために黒に染まるしかなかつたのに。

「あんたが俺の何を知つていていうんだ」

これまでの自分はすべて偽りだ。優しい微笑みも、やわらかな抱擁も、甘い睦言も、何もかも演技に過ぎない。狡猾で醜い『狐』がついた嘘でしかない。

みじめだった。荒んだ感情が木枯らしのように吹き荒れて　た

まもなく泣きたかった。

耐えきれず視線を俯けた男に、それこそ優雅な白鳥のようになんと首を傾げてみせた。

「だつて、あなたは本当のことと言つてくれたでしょ?」

「まだそれだ。

追いつく間もなく飛躍してしまつ女の思考に、男はどうとう根負けした。

「どういう意味だ」

「どうつて……あなたは悪いことをちゃんと認めて、罪を告白してくれたでしょ。あなたは反省することができ、誠実な良心の持ち主なんだわ」

困惑しながら顔を上げると、女はまたにっこりと笑みを咲かせた。「わたしはね、たとえ法を犯していなくとも人として裁かれるべき人間を知っているわ。当たり前の顔で他人の心を踏みにじって、そこに痛みがあることに気づきもしない。そんな罪深い、許しがたい人間をよく知つている」

でもね、と続いた言葉に、女の表情がふつと崩れた。さびしそうな、悲しそうな、しかしそのどれでもなくて。

「あなたはそうじゃない。人間にとつて一番無益で、だからこそ大切なものを……忘れていなかつた」

女は涙を我慢しているのではないかと、なぜか思った。

「だからあなたはきれいなの。ねえ、知つていて? 蓮の花はね、汚い泥のなかでこそ美しく咲くんですって」

「……俺がそうだと?」

「そう、そうよ。泥の海でもがく苦しみを知つていて、雪みたいに真っ白な蓮の花」

きれいだわと熱に浮かされるよう、何かから逃げるように亥いた女を、男は言葉もなく抱き寄せた。

汚泥の底で生まれ、ただそこから抜け出したくて生きてきた。どんなにみつともなくとも情けなくとも、生まれてきたことを後悔せ

ず、自分を誇れる人間になりたかった。

そんな慟哭のような思いが、聞こえた。

「……俺は忘れていたよ。良心なんてものは生きしていくうえで邪魔でしかなくて、とっくに切り捨てた。痛みなんて感じなかつた」はじめて抱きしめる腕に力を、心をこめた。うわべだけのものではない、剥き出しだからこそつたなく荒々しい抱擁。

人のぬくもりはこんなにも熱かつたのだと、ようやく思い出した。「だけどあんたに会つて、いつの間にか捨てたはずのものを取り戻していた。あんたに嘘を重ねるたびに、息ができないくらい苦しかった」

やわらかい髪に頬を寄せる。すがりついてくる小さな指先が嬉しくて これが喜び。これが、幸せ。

「あんたが羨ましかつた。妬ましかつた。憎たらしくて大っ嫌いで……すべてを見透かすような目をするへせに、本気で笑いかけてくるあんたが、俺は」

濁つた泥の上に咲く、清らかな白蓮の花。

そうありたいと望み、いつしか焦がれた。

恋を、した。

ため息のような告白は増していく熱に溶けて消える。だが腕の中の細い体は、まるで最初の呼吸をする赤ん坊のように震えた。

どちらからともなく溢れた涙は、とめどなくふたりを濡らす。この身に絡みつく泥を洗い流すには足りないけれど。

「あんたは、きれいだ」

凛と咲き誇るその花の名を、男は、女は、確かに知っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3337b/>

嘘つきの娘

2010年11月15日15時25分発行